保育者の学びを促進する枠組みづくり〔支援者－被支援者〕関係を打破する試み

坂口美幸・梅崎高行

問題と目的

子育て支援や特別支援の体制整備が緊急性を増すなか、幼稚園・保育所に勤務する幼稚園教諭ならびに保育士（以下、共に「保育者」と称する）の責務は計り知れない。2008年３月28日に改正され、2009年４月１日から施行される幼稚園教育要領では、幼稚園教育に以下３点の充実を期待している。それは、1)発達や学びの連続性を踏まえた幼稚園教育の充実、2)〔幼稚園－家庭〕などでの生活の連続性を踏まえた幼稚園教育の充実、3)子育て支援と預かり保育の充実である。さらに、同じ時期に改正・施行される保育所保育指針でも、1)子どもを健やかに育てること、2)子育てをしている保護者を支援すること、以上２点を保育所の役割の基本として定めている（無藤・民秋、2008)。

現在からおよそ60年前、法に定められた幼稚園・保育所の役割は、子どもが育つ主たる場所は家庭であるという前提に立つ、今日より限定的なものであった。すなわち幼稚園は、家庭教育の補完的役割を担う施設、保育所は、家庭保育に欠ける子どもが福祉の観点で入所する家庭教育の代替施設であった。しかし今回の改正で、幼稚園・保育所の役割はより積極的なものとなり、保育者は、保護者と共に子どもの主たる養育者として期待されていることがわかる。加えて先述した子育て支援や特別支援への対応、具体的には、発達障害児の理解や虐待児への対応、またモンスターペアレンツと呼ばれる保護者との対峙など、子育てをめぐる社会や文化の変動に広く対応を迫られている。このような状況のなかで一部の保育者は、〈いま・ここ〉の子どもと笑顔を交すことすら難しくなっているといって過言ではない。

今日ほどではなかったにせよ、これまでも幼稚園・保育所は、社会・文化の変動に対し自らが変化を遂げることで対応してきた。対応の根幹は、各園・各所が進めてきた学びであり、その成果としての保育者の熟達であった（高濱、2000)。しかしながら今日では、多忙化に伴う学びの喪失により、保育者が熟達しにくい局面を迎えている（木原、2007)。片山（2006）は、1)「縦のティーム保育」を特徴とする幼稚園では、保育経験の豊かな保育者が保育経験の乏しい保育者に知識を伝える手腕や手立て、さらに保育者相互の関係性が、「保育の質」「保育者集団の資質」を大きく左右し、一方、2)保育園では、年配保育者の勘やコツによる保育によって、若手保育者の主体性や意欲が奪われる実態がないわけではない、と指摘している。片山（2006）にあるような各園・各所の閉じた（他園・他所との交流が少ない）実態に加え、今日増す多忙化が、保育者間の対話交流を奪っている可能性もある。いわばかつてあり、子どもの発達を支えた学びの共同体が、今日では消失しかかっているのである（Lave & Wenger, 1991／佐伯、1993)。

このような現状に、専門家と呼ばれる集団の外部支援がないわけではない。むしろ、専門的な情報や専門家による助言は、専門家に代わって子どもや保護者を支える保育者の周囲にあふれて

いる。しかしながらこれらの支援は、保育者が望むように機能しているのだろうか。むしろ専門的な情報や人に対し、保育者は支援される側に位置づけられ、換言すれば、暗黙の〔支援者－被支援者〕関係（川野・岡本、2003）のなかで、‘正しい答えと方法探し’を余儀なくされている側面もあるのではないだろうか。

こうしたなか本学は、保育者養成校として新規参入し、同2008年、「熊本発！発達支援者養成プログラム」の申請により、現代ＧＰに採択された。このプログラムは、現代社会が抱える最たる教育的ニーズ、子育て支援と特別支援の知識・能力をもった発達支援者を養成しようとするものである。現代ＧＰ採択は、本学のめざす保育者養成が社会から求められている証左でもある。

では、あらためていま何が問題か。片山（2006）の整理によれば、学びを欠く現場では、1)保育を科学する習慣、2)組織運営の原則を独自に設け全体に周知させていく意義、以上２点が保育者側に徹底できなくなっているという。以上２点の周知こそが、学びの共同体を喪失し、閉鎖的関係のなかで対話を失った保育者にとって、熟達に向けた最大のポイントなのである(片山、2006)。このうち2)については、それでも各園に委ねる以外にない。しかし1)については、保育者等、専門家養成のノウハウをもつ大学にも、参与できる可能性がある。これ以降、本稿で検討を行う「保育の事例勉強会 保育のほっ。」は、現場の問題1)への対応を目的とする勉強会である。

ところで保育を科学するとは、保育を対象化することであり、具体的にいえば、日々の保育を省察し、修正や新たな意味づけを行っていくという作業をさす(Schon, 1983／佐藤・秋田、2001)。Cranton（1999）は、1)学習者が従来から抱いていた前提や価値観を批判的に振り返り、問い直して、自分の意識を変容させる、あるいは、2)他の視点を検討した結果、従来の意識を正当化するといった、意識変容の学習について言及している。ここでCranton（1999）のいう意識変容の学習がいま、保育を科学・対象化しようとする保育者に求められているのである。

ただし、繰り返し述べてきたように、多忙を極め、あふれる情報のなかで即効性のある回答を求めがちな保育者にとって、保育の対象化をめざす勉強会は魅力的に映るだろうか。種々のハードルを低め、参加者の参加をわずかでも容易とするためには、参加者の求めに応えた勉強会のありようを模索していく必要もあるだろう（森園・野島、2006)。具体的には、保育者の求めに応じた学びの選定や、ときに知識伝達の学び（受動的な学び）も含めつつ、学びを構成していく必要があるだろう。Martinら（1993）やIsen & Daubman（1984）は、学びの促進要因として、肯定的気分の参加者はより長く課題に従事し、肯定的感情は創造性のある思考を促すことを明らかにしている。このことを踏まえ、保育者として責任ある仕事を続けた一日の終わり、勉強会に参加することで保育者が、‘ほっとした’‘楽しい’‘自分のままでいい’と自らを回復できるような要素も、学びの場に取り入れていく必要があるだろう。

以上を踏まえ、資質向上はもとより、保育者自身がほっと安心し安定した自分でいられる場をめざし、「保育の事例勉強会　保育のほっ。」を企画した。本会は、発達支援にかかる講師の講演を刺激とし、各園・各所や各保育者の抱える保育の事例的問題[注1]を共有することで、1)〔支援者－被支援者〕の構図を打破した対等なかかわりを生起させること、2)情報交流を通した仲間同士の学びを生起させること、3)保育者が自ら学びを創造し継続すること、4)保育を対象化する習慣を養うこと、加えて5)保育者自身の精神的健康を維持・回復することを目的とするものである。以降では、07年度の実践を報告し、保育者の学びを促進する勉強会の枠組みについて、検討を行う。

方　法

1．対象者

幼稚園・保育所に勤務する現役の保育者、保育者を志望する学生。

2．方　法

(1)　事前インタビュー

勉強会開催について、近隣５園（Ａ～Ｅ園）の幼稚園・保育所長、もしくは主任に対し、1)参加可能性について、2)勉強会の構成について、インタビューを行った。その結果、曜日と時間の設定は概ね適当との回答を得た（Ａ～Ｄ園）。さらに、「若い先生だけでなく（園長である）私も参加したい」（Ｂ園）、「こうした機会を待ち望んでいた」（Ｃ園）、「園も学びの機会を必要としていた。幼稚園と保育所が集うという発想がよい。（講演など）受動の機会ばかりではなく、勉強会（作業）を含む形態が良い」（Ｄ園）、「現場が最も求めている学びの形態だろう。他園も参加を希望していた」（Ｅ園）と、会の開催を支持するコメントを得た。

(2)　勉強会実施

2008年１～３月までの金曜日に計８回の勉強会を開催した。日時、講師、テーマ、参加人数を表１に示した。

表１　2007年度勉強会実績

	月日	講師-敬称略(所属)	講演テーマ	保育士	学生	学内職員	合計
第1回	1/11	石井章仁(城西国際大学)	「子育て支援の実際」	22	10	2	34
第2回	1/18	菊池悦郎(合志市立西合志南小学校)	「小学校の特別支援と幼保小の連携」	15	7	2	24
第3回	1/25	竹下秀子(滋賀県立大学)	「チンパンジーの子育てとヒトの子育て」	19	9	0	28
第4回	2/1	後藤和文(画図幼稚園)	「子どもの発達に及ぼす遺伝と環境の意義」	21	6	2	29
第5回	2/8	藤井秀代(熊本子育て支援センター)	「熊本の子育て支援」	9	6	1	16
第6回	2/15	尾道幸子(江津湖療育園発達医療センター)	「保護者の気持ちを汲む特別支援とは」	23	2	3	28
第7回	2/29	文野洋(東京都立大学)・亀井美弥子(東京都立大学)・青木弥生(東雲短期大学)	「'乳児ふれあい体験'の意義とは」	6	5	1	12
第8回	3/7	酒井厚(山梨大学)	「子どもの発達と家庭環境」	5	4	2	11
			延べ人数(人)	120	49	13	182
			平均(人)	15.0	6.1	1.6	22.8

3．内　容

(1)　勉強会の流れ

全体は２時間30分で構成した。18時から開場し、軽食を提供しながら集合を待った。18時30分から講演を約50分行った。その後10分の休憩を挟み、残り50分でグループディスカッションを行った。ただし時間配分については、毎回の状況に応じて柔軟に対応を行った。

(2)　講師の選定

子育て支援、特別支援に通じる専門家を、勉強会スタッフで提案した。同時に学内の教員から推薦も受け、各事業間の会議にて報告しながら精選を重ねた。この際、1)内容や各専門家のオリエンテーションが偏りをもたないこと、2)１回限りの登壇であること、3)研究者もしくは実践者であること、4)県内と県外の講師をバランスよく招くこと、以上４点に留意した。

(3)　内容について

毎回の内容は、シリーズ化せず、１回完結型とした。理由は、1)現場は忙しいためいつでも参加できるとは限らない。各参加者がいつ来ても気遅れすることなく学びを得ることができる、2)内容・講師の偏りを回避する、3)様々な考え方を提案し、参加者が自分にあったものを選ぶ主体性を保障する、4)特定の思考や理論に会が固定化されることを回避する、以上をねらいとしたためである。

(4)　参加費について

勉強会が、大学から提供される無料のサービスではないことを周知すると共に、支払ってでも参加したいという自主的な参加者集団の形成をめざすため、有料とした。このことにより、会の創造や運営を共に行う意識づけ、あるいはルール（たとえばディスカッション内容の守秘義務など）の徹底が可能となると考えた。毎回一人500円を徴収し、軽食代として消化した。

(5)　軽食の準備

大学が委託する業者と契約し、サンドイッチ等の軽食とコーヒーを準備した。1) 勤務後の保育者が心身共に勉強会へ参加する準備を整えるためのブレイクタイム、2)保育者同士の情報交流の場、3)食を共にすることで和やかな雰囲気と共同意識の構築、以上３点を提供する目的であった。

(6)　スタッフの姿勢

参加者と筆者らスタッフとが対等な関係であることをめざし、スタッフは、1)参加者に対し「(参加していただき）ありがとうございます」ではなく「お疲れ様です」という姿勢、2)〔支援者－被支援者〕関係を打破した共に学ぶ姿勢を意識し続けること、以上２点を徹底するよう努めた。

(7)　講師の謝礼等

講師には、一律30,000円の謝礼と交通費を支払った（市内在住の講師に対する交通費の支払いはなかった)。経費は軽食代以外、すべて現代ＧＰ予算から計上した。

４．手続き

(1)　勉強会の周知・案内

勉強会のリーフレット（資料１）を作成し、本学関連園、および現代ＧＰキックオフフォーラム（現代ＧＰ採択周知の集会）参加園（以下、合わせて「関係園」と称する）に計33通を郵送した。また、勉強会専用ブログ「現代ＧＰみんなのブログ（http://jpnews2.typepad.jp/gp/)」を立ち上げ案内を行った。ブログは現代ＧＰホームページ「熊本発！発達支援者養成プロジェクト（http://www.klc-gp.jp/index.html)」にリンクした。

(2)　勉強会当日に用いたもの

1)当日アンケート（保育者用／学生用）、2)ビデオ１台、3)ＩＣレコーダー１台、4)デジタルカメラ１台（以上、２～４は講演・ディスカッション記録用）、さらに5)軽食（サンドイッチ等のつまみとコーヒー）を用意した。また、２回目以降は参加者からの意見を取り入れ、ＣＤラジカセを設置し軽食タイムに音楽を流した。アンケートでは、保育者、学生共に、1)今日の気づきを教えてください、2)今後どのような内容を期待されますか、についての記述を求めた。参加者の学びを把握し、学びの環境について意見を求める目的であった。このようにして参加者を、会を共に創っていく共同運営者として位置づけ、会創造のプロセスを共有することをねらった。

(3)　会の終了後

アンケートをコピーし、講師に郵送した。また、ブログを更新し、会の様子を報告した。さらに月に１回程度、勉強会通信「ほっと通信」（資料２）を作成し、会の報告、アンケートの紹介、スタッフの意図（主旨）を伝達した。これらは関係園に郵送すると共に、学内全職員にも配布した。

結　　果

１．参 加 者

各会の参加人数を図１に示す。延べ参加人数は、保育者120人、学生49人、学内職員13人、合計182人であった。このうち、保育者の平均参加人数は15.0人であり、１、２、３、４、６回は15人以上の参加を得た。しかし、５、７、８回は10名を下回り、特に後半は、学生と学内職員を含めた全参加者は、第７回が12人、第８回が11人であった。

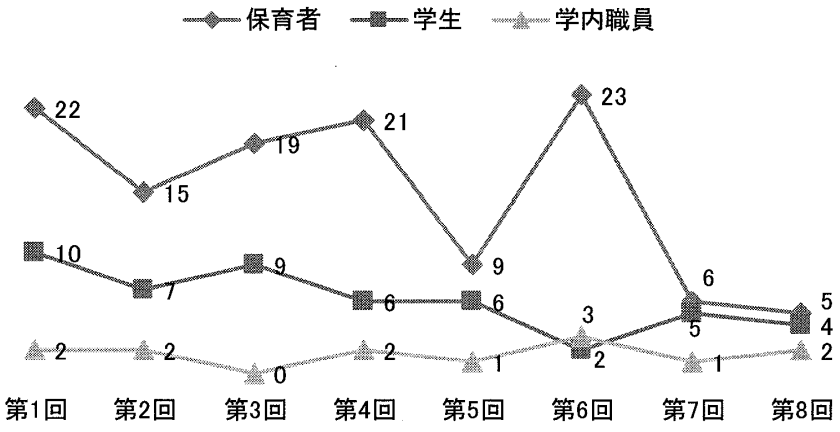


図１　各会の参加人数の推移

2．参加園

各園の参加延べ人数を図２に示す。

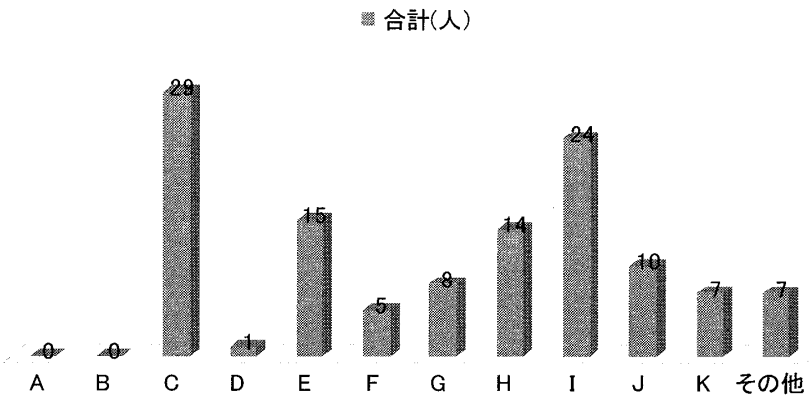


図２　各園の参加延べ人数

事前インタビューを行った園はこのうちＡ～Ｅ園に相当する。Ａ、Ｂ園は共に参加がなく、Ｃ、Ｄ、Ｅ園の平均参加者数はそれぞれ、3.6人、0.1人、1.9人であった。延べ人数が10人を越えた参加５園（Ｃ、Ｅ、Ｈ、Ｉ、Ｊ）の参加者の推移を、別に図示する（図３）。

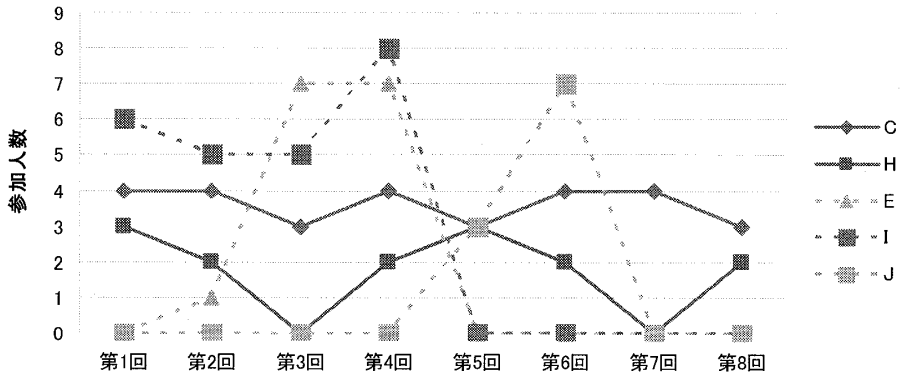


図３　５園の参加者の推移

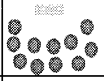
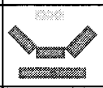
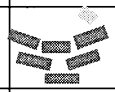
3．場の変容

各会の詳細な報告を表２に示し、このうち３点について報告を行う。

表２　場の変容(1)

回数	第1回	第2回	第3回	第4回
参加人数	34	24	28	29
保育者	22	15	19	21
学生	10	7	9	6
学内職員	2	2	0	2
講師の所属(県内／県外)	県外	県内	県外	県内
講話内容	子育て支援	特別支援	子育て支援	特別支援
場所	b	b	b	b
机の配置	固定	固定	固定	固定
配置図				
パワーポイント使用の有無	有	有	有	無
グルーピング	無	経験年数別(4グループ)	くじ	担当年齢別
講話時間	80分	56分	67分	50分
ディスカッションの有無	無	有	有	有
ディスカッションの議題(時間)	議題なし・談話(15分)	「実際・工夫・困難」(45分)	「自分の体験で助けられていること・困っていること・悩んでいること」(30分)	①「1.教室(配置)、2. 今日一日、3. 今日休んだ子どものこと」について各紙に書き出す(10分)②「スイッチONの工夫」「もっと適切なONになるには工夫があるか」ディスカッション(40分)
ディスカッション開始時の補足	—	自己紹介ゲームを取り入れる	自己紹介＋じゃんけんで司会を決める	自己紹介＋じゃんけんで司会を決める
終了後の様子	あわただしく解散	あちらこちらでディスカッションの続き	—	あちらこちらでグループができ、話が尽きない
アンケート枚数 (保育士／学生)	22	15(11/4)	12(5/7)	4(3/1)
アンケート内容(気づき)	こんな自由な雰囲気の中でお話が聞けるなんて	同じ悩みを持ってることを知り心強く思いました/グループごとに事例を出し合うことで同じような悩みがたくさんあることはわかりましたが、ではどうしたら良いかまではいきませんでした	結局のところヒトは一人では生きられないのだと実感しました	いろんな園のとりくみを聴いて「それいいですね」というような声をもらえてよかった
アンケート内容(要望等)	他の園の先生方の話を聞きたい・話し合いの時間がほしい／ご飯がよかった／冷たいお茶がほしい／もっと気楽なものを期待する／緊張感が少しあるのでBGMをかけておくとか、学生と先生の席を混ぜるなど工夫できる／皆の顔が見れるような椅子の配置で情報交換ができるとよい／開始時間(ラッシュ時間帯)の問題／忙しい現場にとって6時開始は早すぎる／テーブルが固定されてるのでグループが作りにくい／テーブルの配置を工夫してほしい／すぐ保育に役立つような実践的具体的な内容だとうれしい	今日みたいに話せる時間を設けてもらえるといい／席替えはいいが、周りの声で聞こえなくなったりしたので席を離してほしい／グループミーティングがとても楽しかった／担当の年齢の子どもで席を合わせてもいいかも	—	ディスカッションの時間をもう少し長くとってもらえると助かる／ブレイクタイムのBGMもよかった
改善・工夫点	講師の先生もグループに入ってもらう	事前に通信にて会の主旨を伝えておく(それぞれの設定に意図がある旨)／アンケートを分ける／BGMを流す／ディスカッションの時間を設ける	軽食におにぎりを入れる/遠方の講師のためブログにて講師紹介を事前に行っておく	担当年齢別でグルーピング／1つの参加園の悩みを全体の場で共有してみる
スタッフの気づき	アンケートの感想が保育者か学生かわからない／会の主旨を改めて伝える必要あり／講師の都合もありディスカッションの時間が少なかった	BGMがあることで雰囲気が和らぐ／会の主旨を説明したことで先生から「わかったわ」と言ってもらえた／アンケートを分けたことで『お茶がほしい』という要望は学生だったことがわかる	ディスカッション時には各自報告で終わり、内容の発展がみられず、議題の設定を反省	会の中で十分に話せたからアンケートが少なかったのか？／スタッフと参加者も積極的に声をかけあえるような関係になりつつある

表２　場の変容(2)

回数	第5回	第6回	第7回	第8回
参加人数	16	28	12	11
保育者	9	23	6	5
学生	6	2	5	4
学内職員	1	3	1	2
講師の所属(県内／県外)	県内	県内	県外	県外
講話内容	子育て支援	特別支援	子育て支援	子育て支援
場所	a	b	a	a
机の配置	机無し	固定	講師／参加者向かい合わせ	講師／参加者に対して斜め前
配置図				
パワーポイント使用の有無	無	無	有	有
グルーピング	スタッフが振り分け	「同じテーブルに同僚がいないように分かれて下さい」	無	無
講話時間	53分	80分	83分	77分
ディスカッションの有無	無	有	無	無
ディスカッションの議題(時間)	ディスカッションではなく講師によるグループワーク(43分)	①「1.講師にぜひ聞いていただきたいこと2.ご相談したいこと」について紙に書き出す(7分)②「それをグループで解決してください」(26分)	講話の前に「中学時代の乳幼児ふれあい体験の思い出」について学生に質問(20分)／終了後スタッフがまとめの言葉(7分)	講話の前に「1.変化に気づくためにどんな注意をするか、2.(喧嘩などの)介入／見守りはどこで線を引くか」について紙に書き出し、数人発表(25分)／終了後、質問・感想が全体で披歴し合われる(11分)
ディスカッション開始時の補足	—	「先生たちで進めてください」「時間配分もしてください」	—	—
終了後の様子	—	終了後、講師の前に相談したい保育者が行列	—	—
アンケート枚数 (保育士／学生)	11(8/3)	19(17/2)	6(2/4)	4(2/2)
アンケート内容(気づき)	別の(違う)立場の人からの意見はとても考えさせられることも多くありました	いろいろな園の先生の話を聞いたり聴いてもらってアドバイスいただいたり、今まで抱え込んできたものの荷が少し軽くなった	日々、保育に追われ、当たり前のように保育をし、自分の中で考えることさえ忘れていたことをはっとし、深く考えさせられた	わかっていることも、話を聞くことで勉強になるので、参加できるときは、参加させていただきたいと思う
アンケート内容(要望等)	人の話を聞くことは勉強になるのでいろいろな話を聞けるようにしてもらえるといい／メモをとるのに机があると助かる／ワークショップ形式が良かった(楽しい中で大事なことを学べた)／具体的な事例などをいろんな方と話せたらと思う・各園の特別支援の体制なども知りたい	意見交換の場があったのでよかった、続けてほしい／同じ悩みを持っている先生方とたくさん意見交換したい／保育に関する記録の仕方を学んでみたい／先生方との意見交換もすごくよかった／同じ年齢を担当している先生方との意見交流会も行ってみたい／もう少し長いく他の園の方とお話する時間があればと思う／グループ討議の時間がとても勉強になり、同じ環境の人と話しができるとすっきりするのでその時間がゆっくりあると嬉しい	—	—
改善・工夫点	机無しの配置／実践的な学びの場をワークショップとして提供	ディスカッションの進行と展開を参加者にゆだねる	机を入れた配置／保育の対象化を実現するため講師とスタッフとで事前打ち合わせを繰り返した	参加者が揃うまで待つため、講話前に全体に質問を投げかけ、意見交換を行う時間を設ける
スタッフの気づき	ディスカッションの時間を設けるよりも、気さくな雰囲気	県内の著名な講師の講演に、保育者の参加が突発的に激増	話が抽象的すぎたか。保育者の反応いまいち／学生の学びに期待	講師の話を十分提供したい一方で、保育者の集合を待つと開始時間が遅れディスカッションの時間がなくなる、というジレンマ

(1)　机の配置について

勉強会会場ａにプロジェクターが設置される第４回までは、他会場ｂを利用した（ただし第６回に限り、ａ会場が使用できなかったため、ｂ会場を使用した)。ｂ会場の机は床に固定されており配置の工夫ができなかった。そこでグループディスカッションの際は、椅子のみを移動させグルーピングを行った。また、第５回ｂ会場の初利用時に、あえて机を設置せず、講師と向かい合わせで半円形に参加者の椅子を配置した。講師と参加者の親和的な雰囲気づくりを意図したものであったが、参加者からの声を受け、第７、８回は机を配置した。

(2)　ディスカッションについて

ディスカッションの際のグルーピングや時間配分、またディスカッションの内容などは、スタッフ間の連絡を密にしながら、各会ごとに適宜設定を行い、参加者に提案した。第６回以降は、講話後にほとんどディスカッションの時間が残されていない状況であったため、講師への質疑応答、もしくはスタッフのまとめにて会を終えた。

(3)　アンケートの内容について

代表的な参加者の気づきと、寄せられたほとんどの要望について表２に上掲した。「同じ悩みを持っていることを知り心強く思いました」（第２回アンケート、以下「＃２」と記す）、「『それいいですね』というような声をもらえてよかった」（＃４）、「今まで抱え込んできたものの荷が少し軽くなった」（＃６）といった声から勉強会が、保育者の精神的健康にポジティブに作用した結果がうかがわれる。また、会の当初は「すぐに保育に役立つような内容だとうれしい」（＃１）という感想もみられたが、経過と共に「違う立場の人からの意見はとても考えさせられ得ることも多くありました」（＃５）、「日々保育に追われ当たり前のように保育をし、自分の中で考えることさえ忘れていたことをはっとし、深く考えさせられた」（＃７）など、保育の対象化や、情報交流による仲間同士の学び合いも体験されるように変化した。一方、要望については会の初期（＃１、＃２）に多く寄せられた。内容は、食べ物、ＢＧＭ、机やいすの配置、時間など、枠組みについての要望や、ディスカッションの時間の確保を求める声などであった。

考　　察

１．参加者と参加園の状況

図１～３および表２で示されたように、参加の状況は以下４点に集約される。1)毎回２～３人の参加を継続するＣ園やＨ園など安定した園（以下、固定層と称する）がある一方で、Ｅ、Ｉ、Ｊ園のように一度に６～７人の参加がある反面、あるとき参加が途絶える不安定な園（以下、流動層と称する）があるという、二極化した参加の形態がみられた。2)個人での参加ではなく、複数で勉強会に参加するという保育者の姿があった。3)当初のインタビューでは好反応を示したＡ～Ｅの５園であったが、実際に会が始まると出足の鈍い園が多かった。4)勉強会終盤には、参加の顕著な落ち込みがみられた。このうち特に状況4)の理由として、年度末の忙しい時期に勉強会に集う余裕は、自主的であればあるほど失われていたと推測されるが、はたして理由は忙しさのみに止まるのだろうか。第７、８回に参加したメンバーは固定層の保育者に当たり、流動層が皆無の会でもあった。流動層が参加を決める要素は何であるのか。流動層は何を求めて参加するのか。二極化した園のそれぞれの特徴や、参加しなくなった／しなかった理由について直接インタビューを行い、明らかにしていくことが、今後の会展開のヒントにつながると考えられる。

２．受信と発信に用いたツール

07年度の取り組みをモデル化したものを図４左に示す。07年度は、参加者・講師・スタッフの直接対話をめざし、対話の補助的なツールとしてアンケートや通信を使用した。さらに以上の対話を、スタッフが潜在的参加者にも届けることで、潜在的参加者から新規参加者への移行をスム

ーズにできると考えた。しかしながら潜在的参加者は、同僚である参加者との対話、スタッフとの勉強会外の関係性、さらには講師の知名度などにより、いつでも新規参加者となりうる可能性を秘めている。以上のありようを、対話の間に潜在的参加者を位置し直したのが、08年度モデル（図４右）である。さらなる対話の充実と勉強会の拡張が、３者のこのような位置関係（08年度モデル）から新たにめざされる。

なお、並行してブログにおいても会の様子を報告したが、この際コメントは受け付けず発信のみとした。この理由は、匿名によるコミュニケーションを回避したためである。保育者のアンケートでも氏名記載は求めていないが、少なくとも誰が参加したかは把握できるため、参加者の声として安心して受信できる。しかし、インターネットを活用し、顔の見えない声までも受信することが、会発展に寄与するかについては疑問が残る。筆者らスタッフは今のところ、顔を見合わせ、対話を重ねることで、建設的な会の発展は十分可能になるのではないかと考えている。

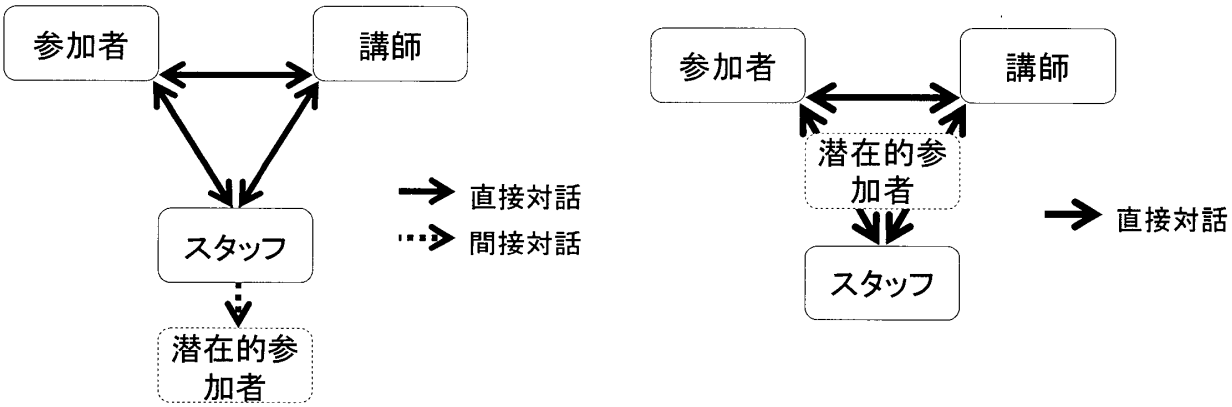


図４　勉強会のありよう（07、08年度モデル）

３．枠組みづくり（受容したこととしなかったこと）

受信と発信を繰り返したなかで参加者の声を受け入れた部分もあれば、スタッフ側の意図を優先し変更しなかった部分もある。例えば、第１回のアンケートを回収した際、保育者の言葉か学生の言葉か弁別できなかったため、第２回からはアンケートを別々に作成し、配布した。それによって、『冷たいお茶が欲しい』（＃１、２）という感想は、学生によるものであったことが判明した。勤務後に勉強会へ参加する保育者がほっとするために、冷たいお茶が本当に必要なのかどうか、細かなことではあるが、検討することにこだわった一例である。というのも、本勉強会はサービスではなく、あくまで保育者相互の学びであるという部分を大切にしたいと考えたことによる。要望に対して即対応という行為は、参加者のお客様志向を助長しかねない。学びに必要な枠組みを吟味し、取捨選択していく一貫した態度が、とりもなおさずスタッフの側に求められている。たとえば先の『冷たいお茶』（＃１）については、通信にて「飲みもの、食べものの持ち込みＯＫです」と対応した。一方、『緊張感が少しあるのでＢＧＭを』（＃１）に対しては、第２回以降で準備することにした。その結果、会場全体に、和やかな雰囲気が醸成されたことを体感した。

そもそも、発信のツールとしての通信作成は、第１回勉強会の反省をもとに開始された。ある保育者から『現場は忙しい。６時開始は早すぎる。もっと現場を知って欲しい』という声を受けた。その際、開始を遅くすることは一つの対応である。しかしながら、1)開始の遅れは閉会の遅れにつながる、2)閉会の遅れは、家庭をもつ保育者の参加を困難にする、3)勉強会には毎回の参

加を求めるのではなく、可能なときに参加してほしいと願う、4) 1回完結型のスタイルは、3)を念頭においたスタイルである、等々について再考した。通信紙上でこうした思考のプロセスを開示することによって、『会の主旨が理解できた。これからは忙しいことに逃げず積極的に参加しようと思う』（＃２）といった積極的な声を受け取ることができた。

このように、参加者の声に対する応答だけでなく、スタッフ側が揺れずに一貫することも、枠組みつくりにとって重要と考えられる。一人ひとりの声に耳を傾けることは重要ではあるが、一人ひとりの声それぞれに反応し、変化させていては、声をあげていない（あげることがまだできない）参加者への配慮を欠くことにもなる。実際、会の主旨を伝えることで「闇雲にやっているのではない、ねらいがあるのだ」というスタッフの姿勢が伝わり、共鳴・共感した参加者が意識高く参加する姿が生まれはじめた。会が成熟に至るまでは、性急な変化を避け、時間をかけて是非を見定めることも、大切なことと考えられる。

４．ディスカッションの質について

第１、６、７、８回は都合上、ディスカッションの十分な時間がとれなかった。さらに第５回はグループワークの形態を採用した。このため、ディスカッションの時間を十分に確保できた会は、第２、３、４回の３回に止まった。こうした状況に、ディスカッションを学びの中心と据える勉強会の試行錯誤が象徴されている。付言すればスタッフ自身も、保育者の対話の展開について手探りの状況であった。「同じような悩みがたくさんあることはわかりましたが、ではどうしたら良いかまではいきませんでした」（＃２）といった保育者の語りが端的に言い表しているように、過渡的な状況でディスカッションが、試み的に提示された議題から逸脱しないばかりか、礼儀正しく発話のターンを守る、いわばモノローグに終始したことも、致し方ないことであった。したがって各園の具体的取組みが抽象化され、グループ全体の学びに展開するといった地平には、いましばらくの時間を要するだろう。ただし目を転じれば、「同じ悩みを持っていることを知り、心強く思いました」（＃２）、「いろんな園の取り組みをきいて‘それいいですね’というような声をもらえてよかった」（＃４）といった感想が寄せられている。これまで子どもや保護者の居場所づくりは社会的関心を集めるものの、保育者の居場所づくりは議論の対象となりにくかった。しかし、子どもと保護者を支える保育者が職務全うのため、健康であることの重要性は論を待たない。「ここに来てよかった、ここに来るとほっとする」という保育者の声が契機となり、ディスカッションの質を高める次の過程へと、歩を進めることができるものと考える。

以上見てきたように、似たような勉強会が各地で展開されるなか、本勉強会は、参加者・講師・スタッフの３者がそれぞれ異なる専門性をもつ点に最大の特徴がある。メリットは、共通言語のないデメリットを逆手に取り、これを生み出そうとするプロセスを共有するなかで、対話を深めていける点にある。すなわちそれぞれの自明が、他者にとって自明ではないのであり、このためあらためて、省察と言語化を余儀なくされる。一見、遠回りに見えるこのプロセスは、共通言語で自らを意味づけ、異なる専門家同士の学び合いをスムーズとするのであり、保育の対象化をたぐり寄せるものにほかならない。このためとりもなおさず、本勉強会は対話にこだわるのである。

さらに言えば、３者による関係性も、〔支援者－被支援者〕関係を打破する上で有効である。議論の安易なオルタナティブ性を遠ざけ、互いに互いの間主観性を発揮し合う余地が、本勉強会にはある。この意味で、試行錯誤を続ける勉強会の枠組みづくりは、それでも前進していると考えられよう。

課　題

以上を踏まえた今後の課題として、以下３点が挙げられる。

１．固定層と流動層の真意にせまる

層による園（保育者集団）の特徴を捉え、直接インタビューによって勉強会参加／不参加の理由を調査する。これによって、学びを促進する要因と阻害する要因とを明らかにし、勉強会の枠組みを保育者にとってより適当なものとする。

２．ディスカッションの質を高める

反省を生かし、2008年度は50分のディスカッションの時間を確保することから始める。そのためにも講演の開始時間を、たとえ集合がまばらであっても時間どおりに開始する（2007年度は集合を待ち、その分講演の開始の遅れが続いた）。以上の旨を通信にて発信し、参加者への了承を求める。また、2008年度は丸テーブルを予算計上し、ディスカッションしやすい環境を整えることもめざす。

３．学びを測り活用する

川野・橋本（2008）を援用し、保育者の学び（勉強会参加の効果）を測定することで、勉強会がその目的を達成しているか否かについて把握する。具体的には、参加者の保育観を集め、これをもとに概念マップを作成することで、勉強会前後の保育者の変化を明らかにする。このとき学生も調査の対象とすることで、初心者から熟達者に向かう学びの軌跡を把握し、本学による保育者養成に活かしていく。

追　記

2008年度がスタートし、課題の１～３に取り組むなかで、ディスカッションの質が展開・変化し始めている。これらについては紙面の都合もあり、次回の報告で明らかにしたい。

引　用　文　献

Cranton, P. 1992 Working with adult learners. Toronto: Wall & Emerson.（入江直子・豊田千代子・三輪健二訳　1999　おとなの学びを開く：自己決定と意識変容をめざして　勁草書房.

Isen, A.M., & Daubman, K.A. 1984 The influence of affect on categorization. Journal of personality and social psychology, 47, 1206-1217.

片山嘉章　2006　保育者の資質向上をめざした取り組み　小田豊・中橋美穂・菅野信夫（編著）　保育臨床相談　保育ライブラリ　保育の内容・方法を知る　北大路書房　第１部第２章第４節，61－71.

川野健治・岡本依子　2003　発達支援における「個性」の回復について：現場的パーソナリティ心理学への提言　日

本性格心理学会大会発表論文集，12，11.
川野健治・橋本望　2008　自殺問題への認識　自殺予防教育による構造の変容　日本発達心理学会第19回大会発表論文集，462.
木原俊行　2007　教師の仕事とは　教員養成セミナー，30，44－45.
Lave, J., & Wenger, E. 1991 Situated Learning. Legitimate Peripheral Participation. Cambridge University Press: Cambridge. (佐伯胖　訳　1993　状況に埋め込まれた学習　正統的周辺参加　産業図書).
Martin, L.L., Warf, D., W., Achee, J.W., & Wyer, R.S. Jr. 1993 Mood as input; People have to interpret the motivation implications of their mood. Journal of Personality and Social Psychology. 64, 317－326.
森園絵里奈・野島一彦　2006　「半構成方式」による研修型エンカウンター・グループの試み　心理臨床学研究，24，3，257－268.
無藤隆・民秋言　2008　ここが変わった！ＮＥＷ　幼稚園教育要領・保育所保育指針　ガイドブック　フレーベル館
Schon, D, A. 1983 The reflective practitioner. Basic Books. (佐藤学・秋田喜代美　2001　専門家の知恵　反映的実践家は行為しながら考える　ゆみる出版).
高濱裕子　2000　保育者の熟達化プロセス：経験年数と事例に対する対応　発達心理学研究，11，200－211.

脚　注

1．ここであえて「事例」ではなく「事例的」問題と表現したのは、詳細な個人情報を共有するクローズドな事例研究会と区別したためである。

謝　辞

会を運営するにあたり、講師として参加くださった先生方、会場や駐車場整理に力を貸してくださった学内職員の方々、その他関与してくださった方々に感謝いたします。

資料1　勉強会リーフレット

九州ルーテル学院大学 現代的教育ニーズ取組支援プログラム

保育の事例勉強会 保育のほっ。

明日の保育の栄養補給。発達支援（子育て支援や特別支援）をテーマに、日々の悩みや工夫を分かち合う、そんな保育者のための勉強会です。

九州ルーテル学院大学では、
保育所・幼稚園の先生方を対象に、勉強会を企画しました。
「こんな場合、他の園ではどうしてるのかな？」という言葉を集め、
一緒に問題を解決したい…そんな思いでスタートします。
参加したあとに、ほっと心が温まる、
「ああ、やっぱり子どもたちはかわいい」と思える…。
そんな会にしたいと考えています。

場所　九州ルーテル学院大学 エカード会館2階
〒860-8520 熊本市黒髪3丁目12番16号

日時　金曜日 18:00～20:30
2008年1～3月の予定　1月 11・18・25日　2月 1・8・15・29日　3月 7日

対象　保育者　＊学生の養成も兼ねたいため、数名の参加をご了承ください。

費用　1回 500円（軽食代として）

内容

サンドウィッチをつまみながら軽食会
まずは腹ごしらえ。一日の保育をふりかえる時間としても活用してください。

外部講師の話を題材とした勉強会
熊本県内外より発達支援にかかわられている方をお招きします。

各所・各園の事例について座談会
お互いに顔見知りになってから始めたいと計画しています。

申し込み 問い合わせ
九州ルーテル学院大学
TEL：096・343・1600（担当：坂口、笠間）
e-mail：hoiku@klc.ac.jp
※軽食準備の都合上、開催前々日までに参加をお知らせください。

九州ルーテル学院大学現代GPの詳しい取組はこちらで
URL http://www.klc-gp.jp
九州ルーテル　現代GP　検索

資料２　勉強会通信

ほっ…と通信 1号

九州ルーテル学院大学現代GP　事例勉強会係
2008.01.15.　文責　坂口

あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願いいたします☆

さて、始まりました！保育の事例勉強会「保育のほっ。」。これから、月１回程度、勉強会の様子などを、皆様にお伝えしてくお便りを、このように作成してみようかな、と思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

第１回勉強会は、１月１１日（金）に、３２人（学生１０人／保育士２２人）の方が参加されました。講師は、城西国際大学の石井章仁先生でした。ご自身の家庭のお話から、キックオフフォーラムでお話のあった「ゆったり～の」（http://www.yuttarino.org/）のお話まで、幅広くお話をしてくださいました。先生ご自身が２児のパパということもあり、父親支援も含めて、今、求められている子育て支援をとてもリアルにお伝えくださいました。子どもだけでなく、母親のほっとできるとこ、父親のほっとできる場所の必要性をお伝えくださいましたが、そのなかで、我々保育士もほっとできるとこが、やっぱり必要だな～と思い、勝手にこの会の意義を再認識しながら聞いていました。今回は、初回ということと、会の都合上、１８時～２０時という短い時間の設定でした。本来の会の目指すところを、少し、詳しくお伝えしたいと思います。↓

●どんな会？？

スタートは１８時半から☆１８時から開場ですので３０分程度、コーヒー、サンドイッチをつまみながら、皆さんの集合を待ちます。もちろん！ご自分での軽食持ち込みもOK♪最初に講師の先生に５０分程度お話をしていただきます。その後１０分程度休憩して、のこり１時間はた～っぷり、グループで座談会。「うちではこうしてるわよー」「そうそう、似たような子どもがいる！」「こういうときって、どうしてらっしゃる？」「うんうん、悩むところよねえ～」など、ワイワイとやっていただきたいと思います。これが、目指すところです。講師からの一方通行のお勉強だけではなく、メインは、自分たちで、自分力を発見し、高めていく。自分がもっている、自分らしい解決策を、自分で生み出していく場にしたいと思っています。

●いつもこれないけど、いい？？

もちろん！OKです！先生たちがいつでも参加できるとは限りません。勉強以外に、今ここで必要な緊急の保護者ケアが入ったり、仕事のシフトの都合がつかなかったり。だからこそ、私たちがこだわっていきたいのは、１回完結型の会です。いつ来ても、自分なりに収穫を持てて家路につける、そんな会。もちろん、継続してくなかで、底辺につながりは生まれてくるかもしれませんが、講師はシリーズではなく、年度内に一人一回でお願いしていこうと思っています。

●講師は、どんなかたがた？？

幅広く深く、をモットーに精選しています。さきほど述べましたように、講師陣はシリーズものにせず、一回完結型で、年度内に２度登場されることはありません。だからこそ、話の偏りを避けることができ、いろんな方を気にせずお呼びできるというメリットがあります。考え方との出会いとでもいいましょうか、相性というのがあります。自分の感性に合う先生（考え方）を探してほしい、そういう願いも込めています。時として、この考え方でなければならない！という考え方に自分が支配されると、目の前の子どもと思いっきり笑えなくなる場合があります。そういうカチコチ状態から解き放たれたいのです。こどももいろいろ、先生たちもいろいろ、それでいい。ご自分の感性を大事にしていただきたいということを願っています。

・・・今後も又、そのほか、もろもろ、随時お伝えしていきます～♪

☆☆☆アンケートより★★★

皆の顔が見れるような配置で情報交換ができるといい。

テーブルの配置をもう少し工夫すると、より近く、いろいろな方とお話できたかもしれない。

もっと気楽なものを期待します。学生や先生方の席を混ぜるなど、さらに工夫ができる。

テーブルはくじ引きにするとか！？

→ １月いっぱいは、プロジェクターの設置が間に合わず、この部屋（机・いす）になる可能性が高いのですが、座り方などなど、考えてみますネ♪

どうぞ皆さん、食べたいもの、飲み物を持ち込まれてください♪

軽食ではなく御飯がよかった。冷たいお茶がいい。

各園の取り組みを色々情報交換ができるといい。

→ 次回からは、たっぷり、この<情報交換>の時間をとりたいと思います♪

余曜日６時はぎりぎり。

→ 次回からスタートは６時半です★それまでは集合＋おつまみ＋なごみタイムです。また３月までは、ほぼ毎週なので特に大変だと思いますが、４月からは月に２回程度の予定です。時間設定については、今後検討したいと思います♪

講演だけでなく、簡単な製作や手遊びなど実践的なものがたまにあってもいい。

→ 2/8はその期待大、です。今後も検討します♪

★★★おねがい☆☆☆

これから、座談会のときなど、各園から００ちゃんや＋＋君など、事例についてお話がでると思います。ここで知りえた個人情報は、この会だけにおさめる、という秘密厳守でお願いします☆

<<<今後の予定>>>　　**※1月いっぱいは1号館2階奥の「保育実習室」で行います**

1/18	金	菊池 悦郎先生	（合志市立西合志南小学校　）	小学校の特別支援と幼保小の連携
1/25	金	竹下 秀子先生	（滋賀県立大学）	チンパンジーの子育てとヒトの子育て
2/1	金	後藤 和文先生	（函図幼稚園　園長）	子どもの発達に及ぼす遺伝と環境の意義
2/8	金	藤井 秀代先生	（熊本子育て支援センター）	熊本の子育て支援

・・・おわりに・・・Sのひとりごと・・・

まったく意味はないのですが、この研究会にむけて、ワンピースを買いました！勉強会の制服にしよ～と思って、気合い入れです。70%OFFだったし♪…え？気合いはoffしていませんよ！やる気。やる気。３月まで毎回着てみるぞー。